

# 慈雲

20号

2011/11

真宗大谷派 慈雲山 瑞蓮寺

慈雲会

〒604-8214

京都市中京区新町通蛸薬師下る

百足屋町375番地

TEL/FAX (075)221-4616

zuirenji@nifty.com

http://www.zuirenji.net/

SinsyuuOotaniha

JiunzanZuirenji

Jiunkai



時守門人  
白言大王  
國大夫人  
身塗麩蜜  
瓔珞盛漿  
持用上王

## 【『觀經』の言葉】

時に守門の人、白して言さく、「大王、国の大夫人、身に麩蜜を塗り、瓔珞に漿を盛れて、もつて王に上む。」

アジャヤセ王が門番に「父王は今も存命か」と問うたことに対して、門番が「先の後イダイケ夫人が小麦粉に蜂蜜を混ぜたものをその身に塗り、身につけた飾りの中に葡萄酒を入れて夫である王の為に密かにすすめておられました」と答えます。

その答え方には、巧みに自分の落ち度でないことを内に含んでいさりげなくいいわけをしています。

私は、この門番は器の小さい人間だなど思っていました。日頃無意識に自己弁護の発言をしている自分に気づき愕然としました。

今回は正信偈の

ほうぞうぼさいんにじ  
法蔵菩薩因位時

ざいせいざいおうぶつしよ  
在世自在王仏所

の二句を学びたいと思います。

法蔵菩薩の因位の時、

世自在王仏の所にましまして、

と読みます。

私たち真宗門徒のご本尊は阿弥陀如来です。しかし、阿弥陀如来は初めから阿弥陀如来だったわけではありません。修行時代があったのです。その時の名を法蔵菩薩といいます。そして、修行するにあたって師匠がありました。それが世自在王仏という仏さまです。

今月の二句は、法蔵菩薩が修行者だった時に、師の世自在王仏のみもとに詣で言葉述べられるところです。

私は法蔵菩薩をどこか遠いところに居られる存在としておくことにどうしても満たされないものを感じていまし

たところ、あるとき次のような言葉に出会いました。アルフレッド・ブルームというハワイ在住の仏教学の先生です。

菩薩に普通の菩薩と法蔵菩薩があります。普通の菩薩は修行する人、それに対して法蔵菩薩は念仏をいただく人です。

法蔵菩薩はどこかにいらつしやるのではなくて、お念仏をいただく人の精神が法蔵菩薩ですよ。念仏者の精神です。

というお言葉でした。これを読んだとき法蔵菩薩を身近に感ずることができたことを思い出します。

それでは「お念仏をいただく人」はいったいどこにおられるかと考えてみますと、私たちにとってはやはり親鸞聖人がお念仏をいただく人の代表者でありましょう。

しかし、親鸞聖人は、御自身のことを法蔵菩薩などとはいわれていません。聖人はご自分のことを『教行信証』の中で次のようにおっしゃっています。

「悲しいことに、この愚禿親鸞はあさましい愛欲の広海に沈み、名聞利養の太山に迷っている。そしてお浄土に生まれることに定まった人々の数に入ったこともいつこうに喜ばず、また浄土のさとりの世界に近づいたこともうれしいと思わない。まことに恥ずべきことであり、痛ましい極みである。」(意識)

〔真宗聖典〕二五一ページ

と悲歎のお心を述べておられます。

自らはどこまでも「悲しきかな」といわざるを得ないような救われ難い存在ですが、そのような自分の前に現れてくださった師匠の法然上人、その上人がお念仏をいただいておりますお姿の中に法蔵菩薩の精神が流れていることを感じておられたのでしよう。

ただひたすら弟子の立場に立つてよき人法然上人の仰せのままに歩み続ける親鸞聖人のお姿の中に、私たちはまた法蔵菩薩の精神が生きていることを感じるができます。

# 今月の言葉

何の力もない我らで  
あるけれども

如来を信じ

如来を念ずる

事によって、生死を

超えて生死に

おいて自由である。

曾我量深

生死の世界のなかで生死が自由にできるならば、それがわれわれの救いというものでしょう。

そこにわたくしどもの自己というものが成立するのでありましょう。

何の力もないわれらであるけれども、如来を信じまた如来を念ずることによって、生死を超えて生死において自由である。

生死のなかにあつて、しかも生死を超越することができ。生死に支配されない。われらの信ずるところの如来はそういう如来である。

生死とは生命的に生きるとか死ぬということですが、仏教では“生死”というときは「迷い」という意味を表わします。わたしたちが生きていくことは、仏さまの目から見れば、そのまますべてが迷いの世界をうろろろしていると映っています。なぜなら人間は誰もが自我を持ち、それを互いに主張し合つて生きています。

『歎異抄』に「まことに如来の御恩ということをばさたなくして、われもひともしあしということをのみもうしあえり。」「まことに、われもひともしあえり。のみもうしあえり。のみにあえり」とあります。

現代人はある程度、人間の自我というものに気がついていきます。

しかしそれはあくまでも人間の知識の範囲内で知っているに過ぎないのです。善いことをしようと思えばいつでもできる、原発に関して言えば、安全で便利なものを作れると思つてやってきた。しかしこのたびそれを超えるほどの自然の驚異に出くわしたのです。仏教からみれば、原発そのものは善とか悪とか決めることはしません。

ただ、それを扱う人間が物事対して善悪の判断をくだし、自己を是とし、相手を非とすることから結局自分で世界をせまくして不自由な場所に身をおいています。生死の世界に存在しているにも関わらず、その自覚がないことがもつとも危険なのです。

曾我先生は、如来の前にいる自分という者を知る時に本当の自己が成立するとおっしゃっています。その自己とは高度な知識を持つていると思つていた自分が、実は何ひとつ大切なことを知らない（「何の力もない」）自分であつたと気づくことです。生死（まよい）いっぱい自分が、如来を信じ念ずることができ、いいかえれば如来に信じ念ぜられているのである。そのとき煩惱あるまま救われる道がある事を知らされます。

「生死の世界のなかで生死が自由にできるならば、それがわれわれの救いというものでしょう。」



## 瑞蓮寺における

### 『宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌並びに前任職七回忌法要』

本年、本山におきまして宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要がいとなまれてまいりましたが、瑞蓮寺といたしまして平成二十四年四月二十一日(土)に厳修いたすこととなりました。

親鸞聖人ゆかりの六角堂から瑞蓮寺までの参道列(行列)を組みます。

その後、お寺にて法要、法話、おときとなります。



参道列にはお稚児さんも出ます。それ

に参加していただけるお稚児さんを募集します。ご興味のある方は住職までお尋ね下さい。(上の写真を参照して下さい)

法話は大谷大学名誉教授の鍵主良敬先生をお迎えいたします。

今回は法要を十一時から行い、おときはお昼頃にいただく予定をしております。お彼岸や報恩講のときには、時間の都合でお持ち帰りいただいている方も、是非一度、お寺でおときを召し上がり、普段話すことの少ない門徒どうしのお話をお楽しみ下さい。以上、御遠忌について

#### 【お知らせ】

○十一月十一日(金) 午前九時より

仏具のお磨きみがをいたします。

○十一月十三日(日)

報恩講ほうおんこうを勤修きんしゆします

引き続きききつづき帰敬式きけいしきを執行しんぎんします

二時 お勤め

三時半 法話

講師 住職

## 四時半 お斎

#### 【編集後記】

急に朝夕冷え込んだと思いきや、日は暖かく、寒暖の激しい日々が続いておりますが、お変わり御座いませんか。第三回の「正信偈に学ぶ」如何でしたでしょうか。

現在月一回の割合で山城一組教学講座「七高僧に学ぶ」が開催されており、私も受講させていただいております。ご存じのように正信偈には七高僧が讃えられております。

また、親鸞聖人七百五十回御遠忌のために昨年からは正信偈の読経の練習を行ってまいりました。

本年も後二月ほどとなつて、今年は例年以上に正信偈にご縁のあつた年だったと改めて思っているしだいです。

長塩浩史

瑞蓮寺のホームページができました。皆様一度ご覧下さい。

<http://www.zuirenji.net/>